

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | Post-discharge depressive symptoms can predict quality of life in AMI survivors: A prospective cohort study in Japan( Abstract_要旨 ) |
| Author(s)   | Sakai, Michi  |
| Citation    | Kyoto University (京都大学)   |
| Issue Date  | 2010-11-24  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/131921">http://hdl.handle.net/2433/131921</a>   |
| Right       |   |
| Type        | Thesis or Dissertation  |
| Textversion | none  |

|  |   |    |      |
|--|---|----|------|
| 京都大学   | 博士 (社会健康医学)   | 氏名 | 酒井未知 |
| 論文題目   | Post-discharge depressive symptoms can predict quality of life in AMI survivors : A prospective cohort study in Japan<br>(急性心筋梗塞退院後のうつ症状は身体的な QOL の回復を予測する) |    |      |
| (論文内容の要旨)  |   |    |      |
| <p><b>背景：</b> 急性心筋梗塞の生命予後の向上とともに、生存者の身体的および精神的な QOL (健康関連 QOL : Health Related Quality of Life) を高めることが重要な課題とされている。欧米の研究では、心筋梗塞発症後のうつは生命予後のみならず、退院後の身体的および精神的 QOL 低値の予測因子になることが報告されている。しかし本邦では、急性心筋梗塞患者の退院後の QOL を前向きに追跡した報告は少ない。また、退院後のうつ症状との退院後の QOL との関連は検討されていない。</p> <p><b>目的：</b></p> <p>1) 急性心筋梗塞を発症した患者の退院後 12 ヶ月間の QOL の推移を記述する。<br/>2) 退院後 1 ヶ月時点のうつ症状と、退院後 1-6 ヶ月の期間の QOL の回復量との関連を検討する。</p> <p><b>対象と方法：</b> 2003 年 6 月から 2005 年 11 月に急性心筋梗塞で入院した 320 例から同意を得た。このうち男性 275 例を対象とした (女性は十分なサンプル数に満たなかったため、解析において除外した)。退院後 1、6、12 ヶ月の QOL の測定には、The 36-item Short-Form Health Survey (SF-36) を用い、身体的 QOL のドメイン：身体機能、日常役割機能 (身体)、痛み、精神的 QOL のドメイン：全体的健康感、社会生活機能、活力、日常役割機能 (精神)、心の健康を測定した。各ドメインのスコアを、日本の国民標準値が 50 点となるよう計算された偏差値スコアに変換した。退院後 1 ヶ月のうつ症状の有無は、心の健康スコアにより評価した。また、QOL の回復量は、退院後 1、6 ヶ月における各ドメインの QOL スコアの差により評価した。退院後 1 ヶ月のうつ症状の有無と、その後 5 ヶ月間の QOL の回復量との関連を、重回帰分析で検討した。</p> <p><b>結果：</b> 退院後 6 および 12 ヶ月の追跡完了例は、218 例および 212 例であり、これを解析対象とした。退院 1 ヶ月では、特に日常役割機能 (身体) (32.8)、日常役割機能 (精神) (35.5)、社会生活機能 (38.8) が非常に低値で、1-6 ヶ月の間で改善した。一方、身体機能、体の痛み、全体的健康感、社会生活機能、活力、心の健康は、12 ヶ月間大きな変化がなかった。重回帰分析の結果、退院後 1 ヶ月のうつ症状と、その後 5 ヶ月間の身体的な QOL : 身体機能 (B = -2.62, 95%CI : -5.00 to 0.23)、日常役割機能 (B = -3.50, 95%CI : -6.94 to 0.06)、および体の痛み (B = -2.92, 95%CI : -5.26 to 0.59) の回復量との間に、負の関連性が示された。</p> <p><b>結論：</b> 本研究では、日本人男性の急性心筋梗塞患者の QOL の推移を示し、退院 1 ヶ月では、特に日常役割機能 (身体)、日常役割機能 (精神)、社会生活機能が非常に低値で、介入の必要性があることを示した。また、急性心筋梗塞退院後のうつ症状が、退院後の QOL、主として身体的な QOL、の回復量を予測する可能性があることを示した。今後、急性心筋梗塞の退院後のうつ症状に着目することで、身体的な QOL 改善に役立つ可能性がある。</p> |   |    |      |

(論文審査の結果の要旨)

近年、急性心筋梗塞の生存者の増加により、発症後の生活の質向上は極めて重要な課題となっている。本研究は、本邦において、急性心筋梗塞退院後の QOL を前向きに長期追跡し、退院後のうつ症状との退院後の QOL 回復量の関連を検討した初の報告である。

研究デザイン、解析を含めた研究方法は十分な検討を踏まえた妥当なものであり、本研究から、急性心筋梗塞男性患者の QOL 各ドメインの推移の特徴が示された。退院 1 ヶ月では、特に日常役割機能 (身体・精神)、社会生活機能が非常に低値で、1-6 ヶ月の間で改善したが、身体機能、体の痛み、全体的健康感、社会生活機能、活力、心の健康は、12 ヶ月間大きな変化がなかった。また、退院 1-6 ヶ月間の QOL 回復因子を検討した結果、退院 1 ヶ月のうつ症状は身体的 QOL の回復遅延の予測因子であることが示された。退院 1 ヶ月のうつ症状と精神的 QOL との有意な関連は認められなかったが、うつ症状があると精神的 QOL 回復が遅延する傾向は認められ、今後、更なる 検証が必要と考えられた。

以上の研究は、急性心筋梗塞退院後において、特に回復支援が必要な QOL のドメインの解明、ならびに、身体的 QOL の回復遅延の予測因子の解明に寄与した。本研究の結果を踏まえた、急性心筋梗塞患者のうつの評価、うつへの介入効果の検証を通して、急性心筋梗塞患者の QOL 改善に寄与することが大きく期待される。

従って、本論文は博士 (社会健康医学) の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本学委申請者は、平成 22 年 10 月 5 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。